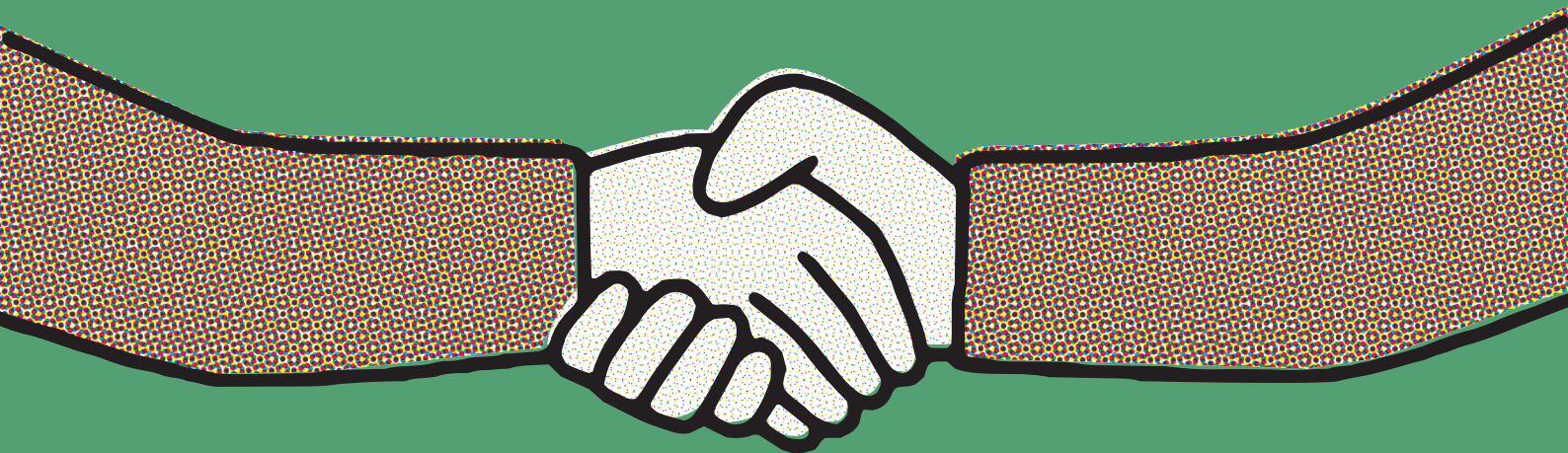
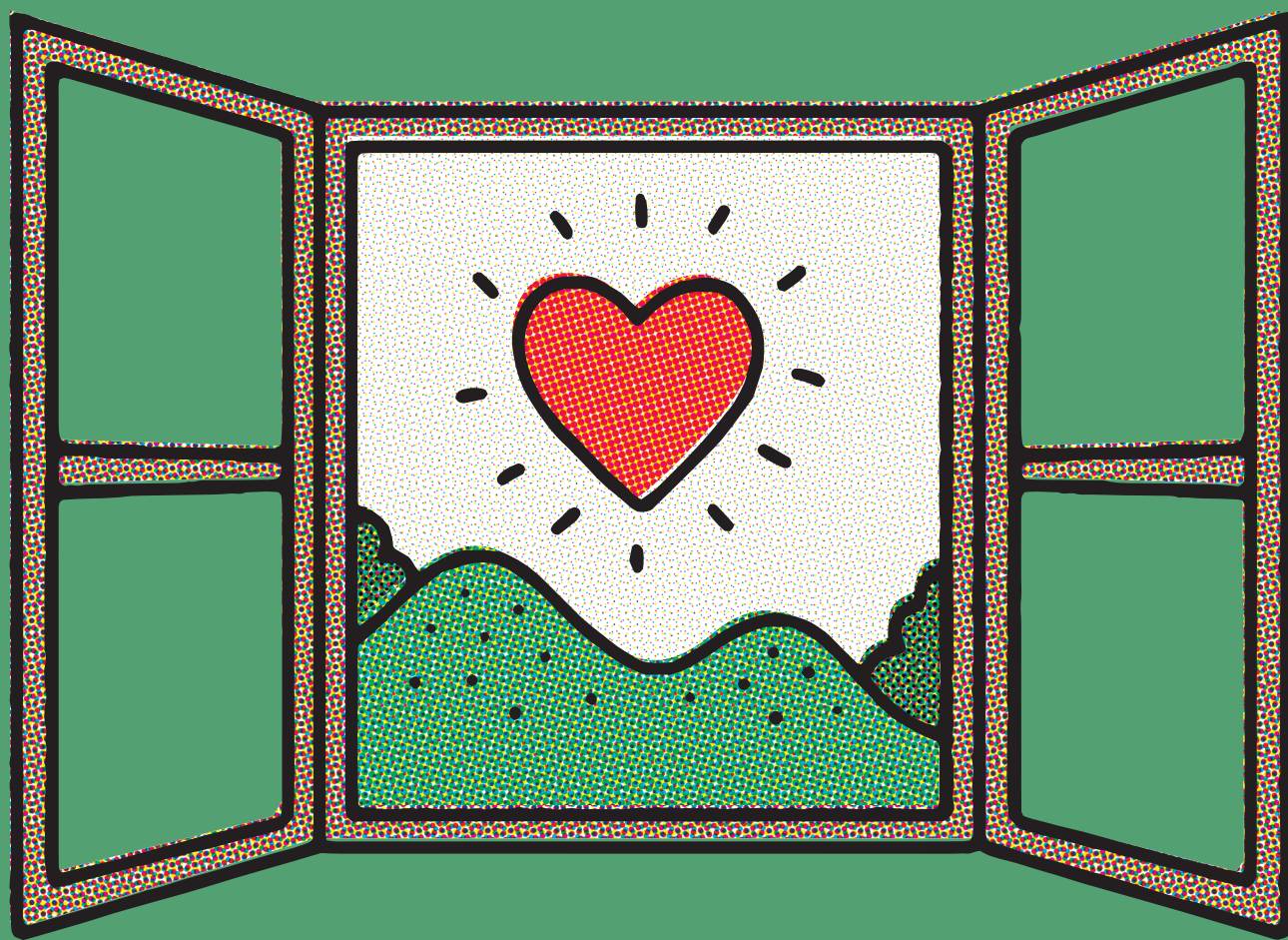


アーツコミッション・ヨコハマ & 九州大学

「ACYアーティスト・フェローシップ助成」の評価に関する研究報告書  
—アーティストの創作活動支援の価値を可視化する試み—

*Arts Commission Yokohama is a Yokohama Arts Foundation program that supports building cross-cutting ties between the arts and society.*



## もくじ

03 はじめに

04 ACYアーティスト・フェローシップ助成とは

06 ダイジェスト

08 事業価値を可視化できる指標づくりの試み

—アウトカム・ハーベスティングを用いた発展的評価  
中村美亜（九州大学大学院芸術工学研究院教授）

19 活動実績

20 ACYスタッフ二人の実感と評価を通して見えてきたACYらしさ

対談：小原光洋（ACYスタッフ）× 森絵里花（ACYスタッフ）

22 おわりに

23 巻末付録

「あなたの事業のアウトカムはなんですか？」

## はじめに

アーツコミッション・ヨコハマ（ACY）は、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団が運営する、芸術やデザインにおける社会連携、地域連携を推進するプログラムです。横浜市文化芸術創造都市施策の一つとして、横浜各地で共創、協働を生み出すための中間支援を行っています。

ACYでは2007年より相談窓口や助成制度に加え、公共空間を活用したプログラムやクリエイターのネットワークをつくるプラットフォーム事業、情報発信など時代の変化に応じてさまざまな企画や事業運営をしてきました。

アーティストへの助成としては若手アーティストへの年間活動支援である「クリエイティブ・チルドレン・フェローシップ」を2016年度から開始し、2020年度より「U39アーティスト・フェローシップ助成」と名称を変えながらも継続しています。2023年度からは横浜市内での滞在を要件に加えるなど諸条件を変更した「ACYアーティスト・フェローシップ助成」を実施しています。これまで、都心臨海部を中心に培われた取り組みを市域全体に広げていく試みです。

文化芸術活動支援が持続可能であるためには、芸術と社会がつながることを検証し、示していく必要があります。ACYではこれまでも事業改善や社会への広がりをもたらすために評価に取り組んできました。評価は査定・チェックするものではなく対話やコミュニケーションの機会であること、指標を考えることが価値の可視化や改善につながることなどの知見を積み上げています。

そうした経緯も踏まえ、2024年度は九州大学大学院芸術工学研究院の中村美亜研究室と協働し、「ACYアーティスト・フェローシップ助成」を題材にアカウントビリティの向上のため、文化的価値を測る評価方法の策定に取り組みました。アーティスト支援を出発点に、キャリア支援と郊外部展開の両面で設計されている助成プログラムですが、今回はとくに地域への広がりを目指しています。

本報告書では価値や評価について考えた試行錯誤の軌跡をまとめています。評価に悩む、文化や行政に携わる方のヒントになれば幸いです。

アーツコミッション・ヨコハマ

# ACYアーティスト・フェローシップ助成とは

## 助成趣旨

本プログラムは、アーティストの活動場所として横浜の各地域の可能性を探る試みです。アーティストは、必要な資金やネットワーク、新しい表現や活動の場所の獲得を通して自身のキャリアアップを目指します。また、ACYは人を惹きつける新たな価値創造を目指して、横浜各地の文化の多層化と複合化に取り組みます。

日々新しい表現を追求し、構想を磨き、創作活動にはげむアーティストを対象とします。

地域に開いたユニークな活動をするコミュニティ拠点に、自らの表現を追求するアーティストが入りこむことで起きる予測不可能な化学反応を期待します。(2023年度)

## 対象

趣旨にある活動を行い、かつ、以下の条件をすべて満たすアーティスト個人

- 美術、舞台芸術の分野において活動するアーティスト
- 過去のACYによる助成プログラムにおいて、申請者として採択されたことがないこと

## 提案内容

下記を含むキャリアアップにつながるリサーチや滞在制作、作品発表等、対象期間における創作活動

- ①年間を通じた創作活動
- ②ACYが指定する横浜市内の拠点での滞在(最短6泊7日)
- ③地域住民と交流する活動(公演、展覧会、ワークショップ、トークイベントなど)

## 対象となる期間

6月1日から翌年2月末日まで

## 年間スケジュール (2023年度の場合)



## 助成額

1,000,000円 × 5名 (定額/年度毎)

## サポート内容

- 相談・情報提供や人材の紹介
- 滞在拠点における活動の支援
- ACYのHP等、財団がもつ広報ツールを活用した広報協力
- 滞在の様子や展示・公演風景、レビュー等を掲載した記録冊子の作成・謹呈

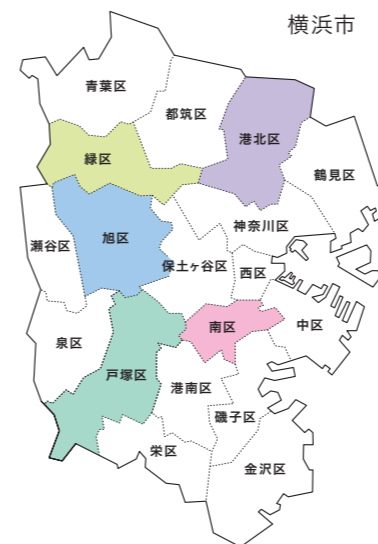
## 審査基準

- 趣旨理解：助成趣旨を理解した提案になっているか
- 独自性：芸術としての手法や形態、また思想や題材等、優れた発想や独自性を有しているか
- 実現性：計画および資金使途が明確であり、活動規模やスケジュールが適切か
- 地域性(2024年度より)：横浜での滞在と創作や発表の意義を有しているか

## 2022年以前のアーティスト支援助成との主な変更点

- 年齢制限の撤廃：従来の39歳以下の年齢制限を撤廃し、幅広い年齢層のアーティストを対象としました
- 横浜市内に活動拠点を有する条件の撤廃：全国各地、海外からの応募が可能になりました
- 横浜市内での滞在と地域住民と交流する活動の必須化：ACYが指定する横浜市内の拠点での6泊7日以上での滞在および活動の実施を必須としました

# 滞在拠点



## ●左近山アトリエ131110

旭区左近山16-1 左近山団地1-31-110



撮影：菅原康太

旭区にある左近山団地の中にあるショッピングセンターの店舗を活用したアート拠点。日頃からカフェとして地域の方が立ち寄り、ギャラリーやワークショップ会場として、時には屋外の広場も使ってさまざまな活動を展開しています。

## ●Co-coya

緑区中山5-9-1

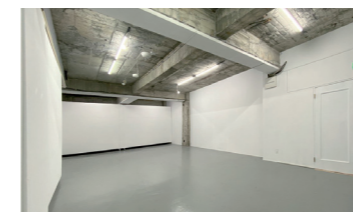


撮影：大野隆介

緑区中山の空き家を改修した職住一体型の地域ステーション。シェアアトリエやコワーキングスペースでありながらも、万が一の際には災害拠点にもなる地域の人が集いつながるコミュニティスペースとして、さまざまな活動が繰り広げられています。

## ●アートスタジオ アイムヒア

南区弘明寺町259 GM2ビル2階



撮影：渡辺 篤

南区弘明寺の展覧会やイベントを行うオルタナティブスペース。現代美術家の渡辺篤さんが孤独や孤立を感じる当事者と協働して行う「アイムヒア プロジェクト」と、ビルの再生事業や街の発展に取り組む株式会社泰有社が共同運営しています。

## ●ARUNŌ -Yokohama Shinohara-

港北区篠原町1410



撮影：大野隆介

港北区・新横浜駅近くの旧横浜篠原郵便局を活用した文化複合拠点。「未知への窓口」をコンセプトにシェアスペースや日替わりカフェ、ポップアップテナントなど「つながりたい」「やってみよう」を応援してくれる施設です。

## ●Murasaki Penguin Project Totsuka

戸塚区戸塚町4247-21 地下1階



撮影：堀越圭吾 (エスエス)

アーティストグループ Murasaki Penguin が運営する、戸塚駅からほど近くの舞台芸術とマルチメディアアートの劇場。ダンスや演劇、音楽、映画などさまざまな形態の作品発表や展覧会、ワークショップを開催しています。

# 2023・2024年度のアーティスト・フェロー

## 2023



**加藤 立**  
(かとう りゅう)  
アーティスト



**坂本 夏海**  
(さかもと なつみ)  
アーティスト

撮影：Alan Dimmick



**私道 かび**  
(しどう かび)  
作家、演出家

撮影：山下裕英



**山岡 瑞子**  
(やまおか みずこ)  
映像作家、アーティスト



**ユニ・ホン・シャープ**  
アーティスト

## 2024



**鎌田 友介**  
(かまた ゆうすけ)  
美術家

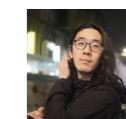
撮影：Charlotte Raymond



**工藤 春香**  
(くどう はるか)  
アーティスト



**敷地理**  
(しきち おさむ)  
振付家、ダンサー



**永田 康祐**  
(ながた こうすけ)  
アーティスト



**野村 真人**  
(のむら まさと)  
演出家

撮影：shimizu kana

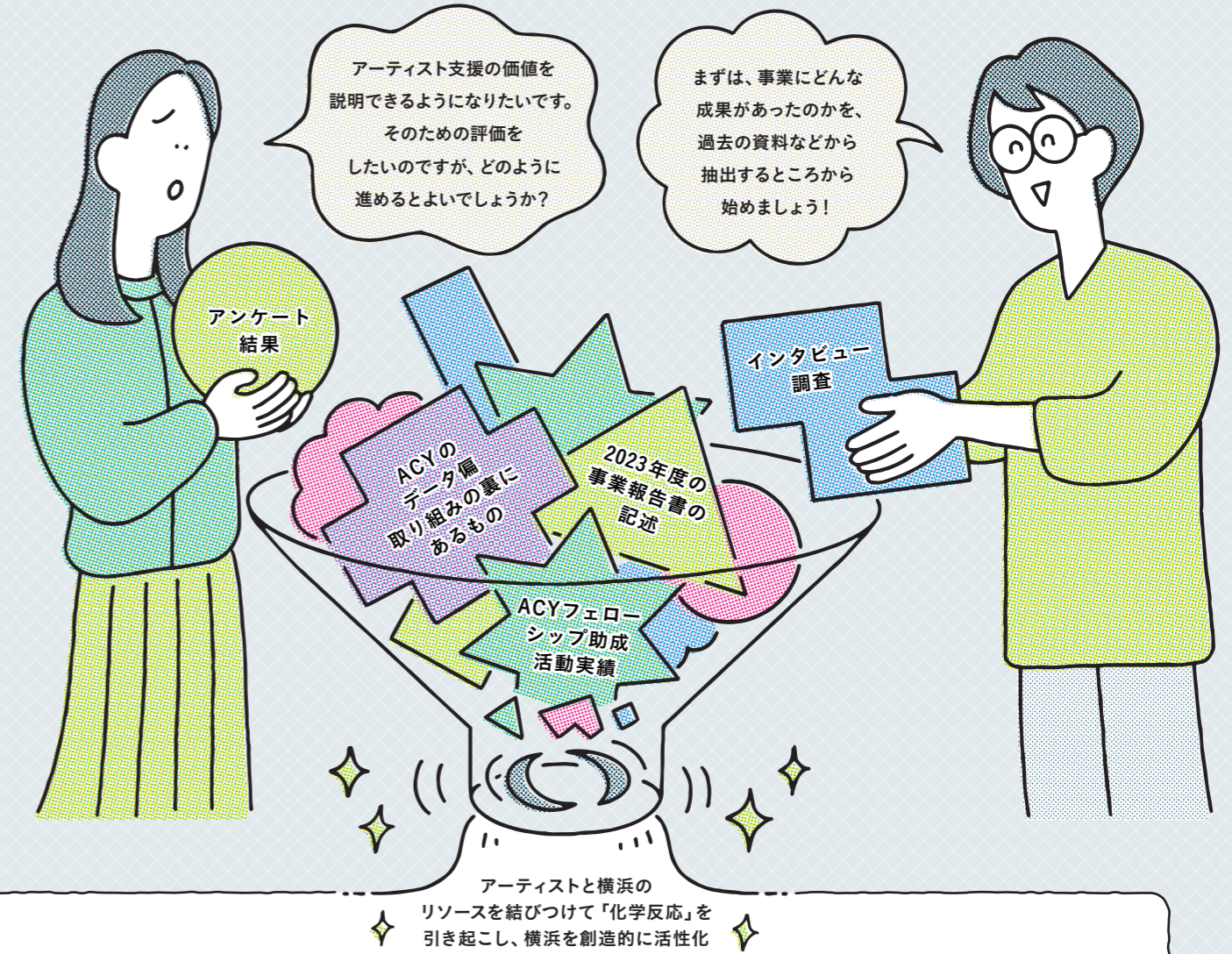
# 共同研究レポート ダイジェスト

Collaborative Research Report Digest

この研究レポートは、「ACYアーティスト・フェローシップ助成」に関するアカウントビリティの向上と、事業価値を可視化できる指標づくりを模索した研究プロセスをまとめたものです。

事業が終わってからどんな成果があったかを探し出し、「収穫」する評価アプローチ（アウトカム・ハーベスティング）と、組織の学習を促し、イノベティブな発展を後押しする伴走型の評価アプローチ（発展的評価）を用いた本研究から、どのような価値や指標が見出されたのでしょうか。本編をご覧ください。前に、ダイジェストでご紹介します。

詳しいプロセスや結果はぜひ次ページからの本編をご一読ください。  
なお、本研究では2023年度の事業を主な対象としています。



## 事業の価値 — アウトカム・ハーベスティングから見てきたもの

### フェローシップ助成の価値とは

#### アーティストにとって

- ①アーティストとしての活動を支援する助成制度
- ②ACYの人材ネットワークを活用した充実した支援

#### 拠点にとって

- ③知り合えなかった人たちとのつながり
- ④拠点の活動やコミュニティに対する認知の広がり
- ⑤他拠点との創造ネットワークの形成

#### 地域の人にとって

- ⑥アーティストとの出会いによる視野の広がり
- ⑦日常生活では難しい「思い」の共有や交換
- ⑧表現やコミュニティへの参加に対する関心の高まり

### より充実した

### 助成制度にするには

- ①公募要項・審査方法・実施内容の体系的な検討
- ②事業内容や意義を知ってもらうためのより効果的な広報
- ③横浜市の他の政策とのさらなる連携

## 評価指標案 — 発展的評価から導き出されたもの

### アーティスト

- ①アーティストが横浜市内で新しい人や情報と出会ったか。
- ②アーティストが中・長期のキャリアや作品のビジョンがもてたか。
- ③アーティストが助成後に滞在拠点や市内他施設を活用できているか。

### 拠点

- ④拠点が新しい人や情報と出会ったか。
- ⑤拠点がこれまでとは違うアイデアや活用法を得たか。

### 地域の人

- ⑥文化芸術にふれる機会を広げることにつながっているか。
- ⑦横浜市内の新たな一面を知る機会があったか。
- ⑧アーティストや作品との出会いが、心理的な変化や認識の変化につながっているか。  
具体的にどのような変化があったか。

# 事業価値を可視化できる指標づくりの試み

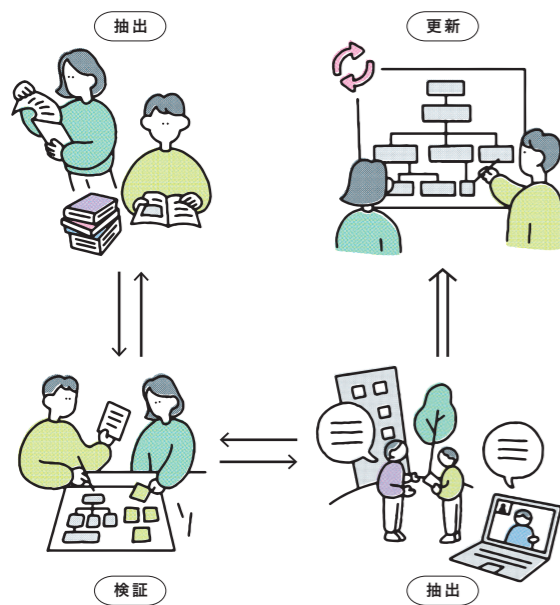
—アウトカム・ハーベスティングを用いた発展的評価

中村美亜（九州大学大学院芸術工学研究院教授）

## 1. 背景と目的

近年、文化事業でも評価が求められるようになってきた。しかし、計画通りに実施できたかどうかや、参加者数・稼働率など数えやすい数値を報告するものが主で、本来の文化事業の価値が評価されているとは言い難い状況がある。一方、「地域が活性化する」、「市民の心が豊かになる」など将来的なビジョンが示されることは多いが、抽象的過ぎて何を達成したらよいかかわからない、どうすればそのような状況になるのか筋道がはっきりしないという課題がある。

そこでACYは、「ACYアーティスト・フェローシップ助成」（以下「フェローシップ助成」）を評価するのに適切な指標を確立すべく、大学と共同で調査研究を実施することにした。共同研究では、ACYスタッフの森絵里花と小原光洋が筆者と協働して、ACYの事業評価を行いながらアカウントビリティ（説明責任・能力）向上をはかる方法を模索し、事業価値を可視化できる指標づくりへとつなげた。



## 2. 方法

新たに指標をつくるためには、まず何よりも、事業にどんな価値があるかを把握することから始めなくてはならない。そうでないと、事業の価値とは無関係な指標ができてしまう恐れがある。そこで次の2つの問い（リサーチ・クエスチョン）を設定することにした。

- ① 助成された個々の事業はどんな成果を生み出しているか？
- ② フェローシップ助成は全体として、どんな道筋で、どんな成果を生み出しているか？

①にはアウトカム・ハーベスティングという方法を用いた。アウトカム・ハーベスティング (outcome harvesting) は、直訳すると「成果の収穫」。成果の予測が困難なケースで用いられる評価方法で、事業が終わってからどんな成果があったかを探し出し、「収穫」するアプローチである。今回は、まず(1)過去の報告書や記録を見返して、成果を洗い出し（一次抽出）、(2)ロジックモデルを作成しながら、どのようなプロセスで成果が生まれるかを検証した。その後、(3)追加調査を実施し、隠れていた成果を見つけ出し（二次抽出）、(4)ロジックモデルを更新していった。

一方、②には、アウトカム・ハーベスティングに加えて発展的評価という方法を用いた。発展的評価は、組織の学習を促し、イノベティブな発展を後押しする伴走型の評価アプローチである。直線的ではないプロセスを特徴としており、評価活動と事業の改善・発展が一体的に行われる。今回は、ロジックモデルの作成・更新と不足しているデータの収集を繰り返しながら評価を重ね、募集要項の見直し、アンケート項目の検証、評価方法や指標の検討などを行い、事業を改善・発展させていった。

なお、本研究では、一般に言われるエビデンスの「厳密性」や「信頼性」に固執せず、評価学で近年議論されている「実用性」や「活用可能性」を重視した。

## 3. プロセス

以下のプロセスは、実際には直線的ではなかったが、わかりやすさを考慮し、シンプルに整理した形で示す。

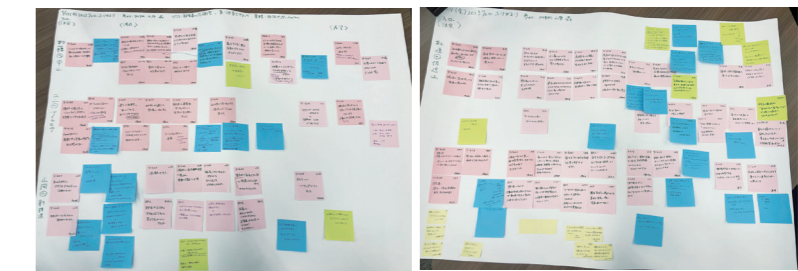
### 1) 2023年度の事業報告書からアウトカム(成果)を抽出

過去の報告書や記録から抽出したアウトカムを分類しながら見取り図を作っていくと、アーティスト、拠点、地域の人というそれぞれの視点から見た「フェローシップ助成の価値」が見えてきた。

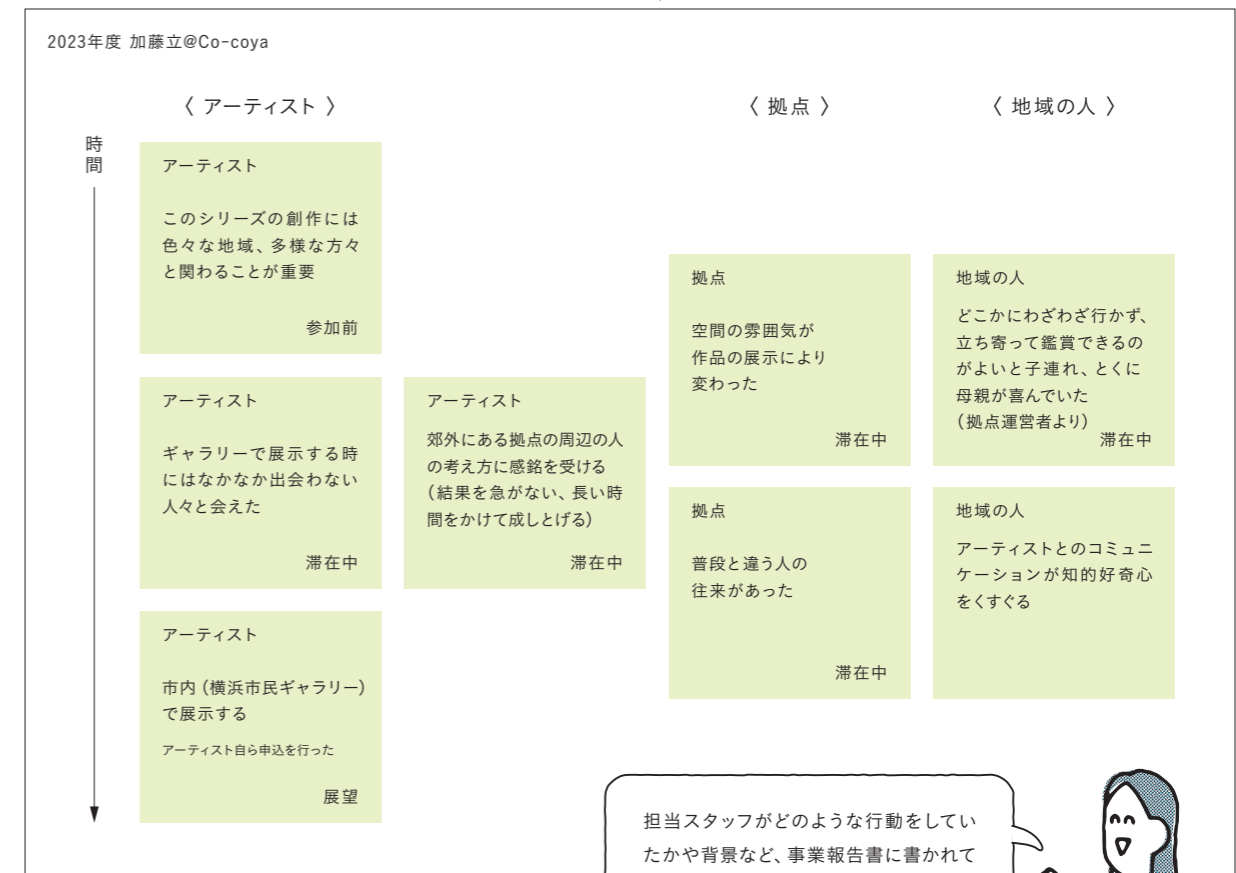
アウトカムの多くは複雑な因果関係から生まれるものです。そのため、これまでの取り組みを振り返って活用可能性の高い成果を抽出し、計画や評価に生かすのが現実的。アンケート項目の改善にもつながります。

中村先生

2023年度の報告書から抜き出したアウトカムのマッピング



〈上記のマッピングから一部を抜粋〉



担当スタッフがどのような行動をしていたかや背景など、事業報告書に書かれていないこともヒアリングしながら、付箋に書き込んでいきました。

ACYスタッフ 森


## 2) 助成対象者(拠点)ごとにロジックモデルを作成

前ページのマッピングをもとに、ロジックモデルを作成(2年分合計10個)。アウトカムの主語を意識する前は、「アーティスト」や「財団」に起きる変化ばかりに目が向いていたが、主語を「拠点」や「地域の人」に代えると、他にもアウトカムがありそうなのが見えてきた。

→追加調査の実施(pp.12-15)

主語を意識することが重要です。事業の実施主体が主語になるのは「アウトプット」、参加者、地域の人、コミュニティなどが主語になるのは「アウトカム」。アウトカムは、ステークホルダーごとに分けて考えるのがポイントです。

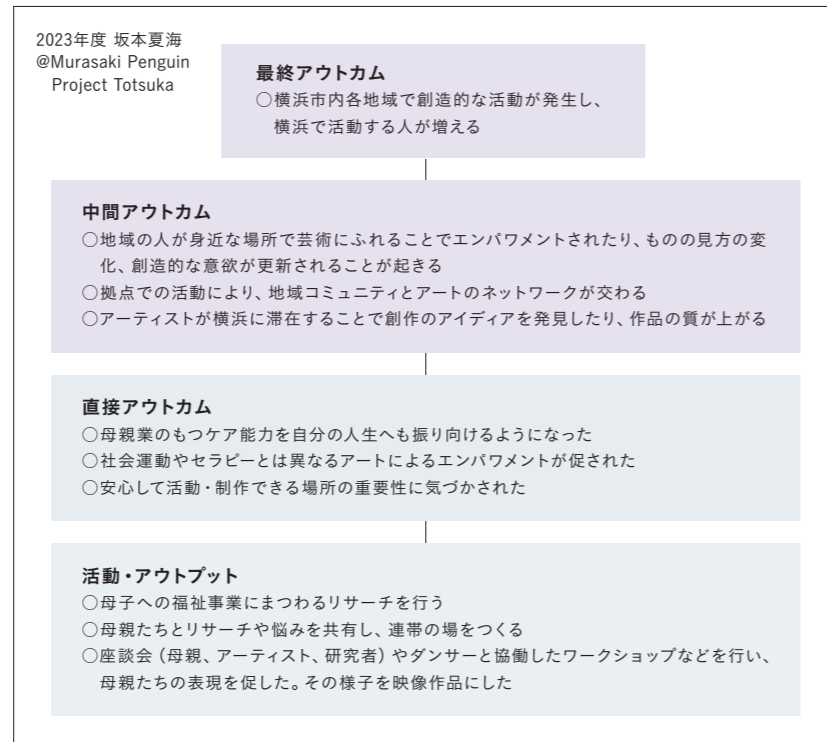
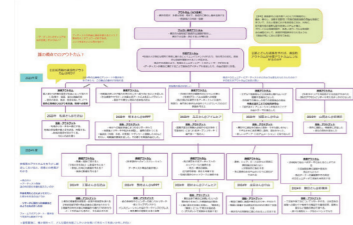
ポイント!



中村先生

### 助成対象者(拠点)ごとのロジックモデル

〈下記のロジックモデルから一部を抜粋〉



### ロジックモデルとは…

事業が成果を生み出すプロセスを論理的仮説として図示したもの。一般には、インプット、活動、アウトプット、アウトカムを、「もし~したら、~なるだろう」という因果関係で示していく。

→作成のポイント(p.23の2)


実施事業者			参加者・地域の人
インプット (投入・資源)	アクティビティ (活動)	アウトプット (出力・結果)	
ヒト・モノ・カネ	実施する事業活動	組織や事業活動がもたらす直接の結果 例) 展示・公演、活動回数、参加者数	<b>アウトカム</b> (成果) 事業がもたらす人や社会の変化、便益 <b>直接アウトカム</b> ▶ <b>間接アウトカム</b> 例) 参加者の気づき、他者への共感      例) 地域の活性化、共助の広がり

## 3) フェロウシップ助成のロジックモデルを作成

前ページの10個のロジックモデルをもとに、フェロウシップ助成全体のロジックモデルを作成した。直接アウトカムの主語を「アーティスト」「拠点」「地域の人」と分けて考えると、ACYの中間支援としての役割が見えてきた。

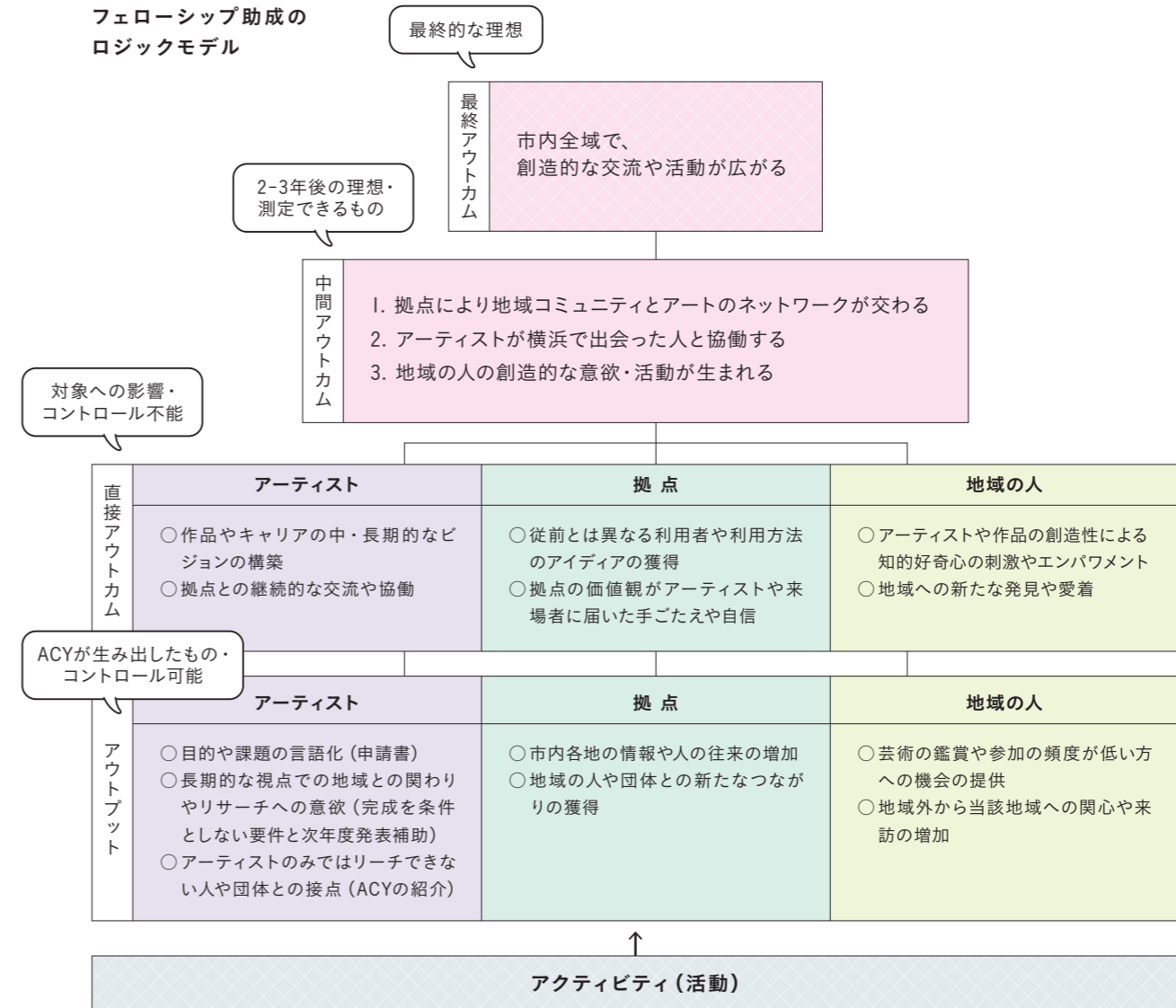
中間アウトカムや最終アウトカムには、直接アウトカムとつなげることができる具体性のある内容で、かつ芸術にあまり関心のない行政や市民にも伝わる言葉を入れましょう。そうすると、アカウントビリティ(説明責任・説明能力)が向上します。

ポイント!



中村先生

### フェロウシップ助成のロジックモデル



ロジックモデルを考えることで、事業検証のためのデータ収集や情報発信の方法を再検討する必要性に気づきました。例えば、以下について改善を試みています。

- アーティストへの事前・事後アンケート
- 参加者へのアンケート
- アーティスト、拠点、地域の人への事後ヒアリング
- 募集要項

ACYスタッフ 森

#### 4) 追加調査を実施

5つある拠点のうち、横浜市緑区中山の住宅街にあるコミュニティスペース「Co-coya」と戸塚区の戸塚駅近くにあるアートスペース「Murasaki Penguin Project Totsuka」の2カ所を訪問し、拠点の運営者に話を聞くなど現地調査を行った。また、2023年度の活動に関わった地域の人たちにも後日オンラインでインタビューを実施した。

聞きたいことだけを質問するのではなく、最初の関わりから時系列順に「事実」「考え」「感情」を整理しながら聞いていくと、聞きかかったことをうまく引き出すことができます。



中村先生

### Co-coya (緑区中山)

#### 拠点へのインタビュー

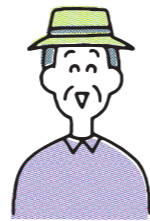


関口春江さん  
(拠点運営者)

「港の人がこっちのことを見てくれたんだ」と感じました。北部は独自にがんばろうというようなエリアなんですね。「こういうコミュニティっていいね」という評価をいただいて、うれしかった。ここに都市部の方が興味をもって話を聞いてくれる機会が増えました。

「拠点をめぐるツアー」で、他の4拠点の人たちとも知り合うことができました。お互いの拠点に訪問して、活動を見たり、お話を聞いたり。それを参考にできて、私としてはすごく益がありましたね。

ACYのメリットは、私がかかっている以上の情報があること。とくに人の情報が一番大きいかなと思っています。いろんな人の目にふれたり聞いてもらったりして、ここに興味をもってくれる人が、アーティストも含めて、増えていく。それはもう私の想像を超えた広がり。これが一番私にとってはありがたいことです。



齋藤好貴さん  
(拠点オーナー)

#### 地域の人へのインタビュー



八島道夫さん  
(中山在住)

イベントだとそのイベントの内容がメインですよね。そうではなく、加藤さんというアーティストが来て、そこに居る。作品とそのアーティストにセットで出会える。しかもそのアーティストが生活しているから、アーティストの日常も見える。それは貴重な体験だなと思います。加藤さんが横浜で個展をなさった時にも見に行きました。私以外にも5~10人くらいは見に行っただけです。

身の回りの友達とだけ話していると、ポキャブラリーが貧しくなってしまうんですよ。「こんな社会、まちがっておかしいよな」とかって。でもアーティストさんって、そういう発想じゃないんですよね。社会を全然違うところから捉えようとしている。「今取り組んでいるものを敷衍していくと、資本主義の根本的な矛盾などの話につながりそうですね」みたいに。



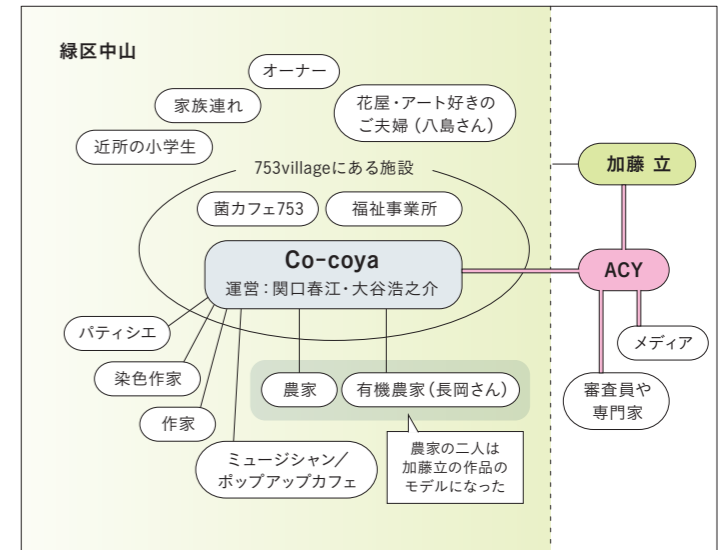
長岡親一郎さん  
(近隣地区在住在勤、Co-coya定期利用者)

- ..... 2023年度アーティスト・フェロー
- ..... 滞在拠点
- ..... ACYがつないだネットワーク



ACYスタッフ 小原

今日の話聞きながら、展示はもちろん重要なんですけど、一番はそのアーティストと会って喋ってとか、仲良くなって活動をフォローするとか、そういうことが、この制度の中では重要ななと感じました。



#### データ編

● 2023年のアーティスト・フェローが2024年に横浜市内で発表した件数

5名中、5名 計7件

フェローシップ助成の拠点ではない場所での発表も。

- 加藤立：個展「未来のポートレート」  
日時：2024年6月13日(木)～6月23日(日)  
会場：横浜市民ギャラリー 展示室B1F
- 坂本夏海：  
「Dismantling Motherhood」上映会  
Day1  
上映会+トークイベント  
日時：2024年11月30日(土) 14:00～16:00  
会場：フォーラム(男女共同参画センター横浜)
- Day2  
日時：2024年12月1日(日) 14:00～19:00  
会場：アートスタジオ アイムヒア

- 私道かび：演劇版「団地のこえ」  
日時：2025年1月18日(土) 13:00～、15:00～  
会場：左近山アトリエI31110
- 山岡瑞子：映画「Maelstromマエルストロム」  
上映+哲学対話  
日時：2024年11月17日(日) 14:30～17:30  
会場：Murasaki Penguin Project Totsuka
- ユニ・ホン・シャープ：  
「ENCORE-mer」  
日時：2024年12月4日(水) 20:00、12月5日(木) 20:00  
会場：BankART KAIKO
- 「ENCORE-violet」(世界初演)  
日時：2024年12月6日(金) 20:00、12月7日(土) 15:30  
会場：BankART KAIKO

#### 取り組みの裏にあるもの

● あるACYスタッフの1年間の拠点訪問回数

計48回 (2023年)

打ち合わせの他、食事会などでの交流も。じつは非公式の訪問で得られる情報が多い?!

#### 取り組みの裏にあるもの

● あるACYスタッフの名刺交換数

597枚 (ACY事業に携わった32ヶ月間)

1ヶ月の平均は約19枚。普段からさまざまな人たちと出会い、つながることで、アーティスト・フェローへの多様な情報提供・協働者の紹介ができる。

# Murasaki Penguin Project Totsuka (戸塚区戸塚町)

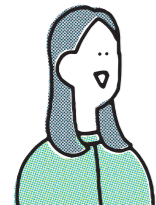
## 拠点へのインタビュー



黒田杏菜さん  
(拠点運営者)

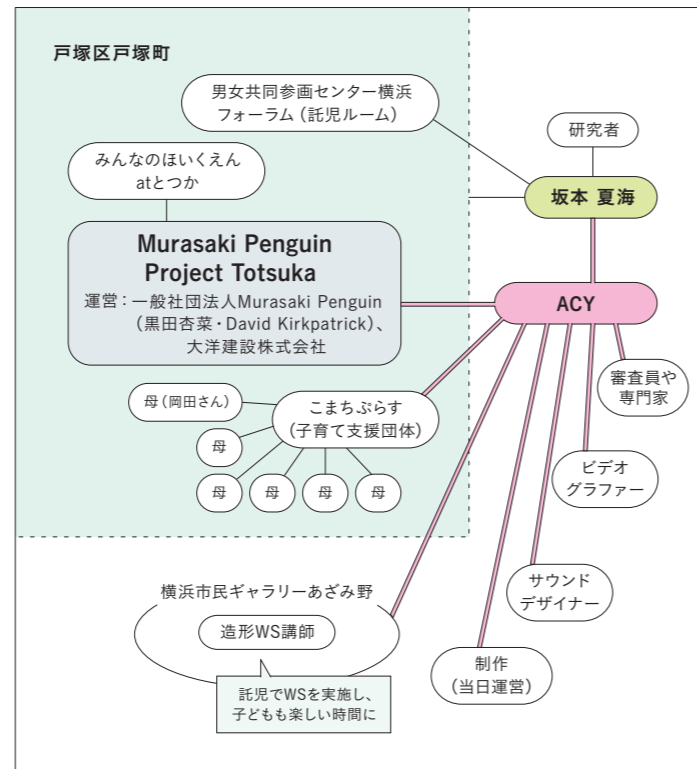
母親を対象にするなら、ACYのスタッフが子育て支援団体のこまちぶらすの森さんに相談していただきました。私たちも、こまちぶらすを詳しく知らなかったので、つながることができてうれしかったです。ACYが行政と民間の間にうまく入りこむみたいなのが、2023年度はうまく機能していましたね。

- 2023年度アーティスト・フェロー
- 滞在拠点
- ACY
- ACYがつないだネットワーク



ACYスタッフ 森

今回お話を聞いた方は、それぞれ言葉をもっていらっしゃいましたね。作品の性質とか、コミュニティの性質もあるかもしれません。別の拠点がある左近山団地で聞いたら、また違った感じになったのだらうと思います。



## 地域の人へのインタビュー



岡田容子さん  
(プロジェクト参加者)

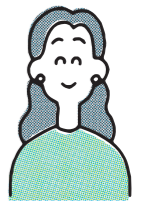
自分の「黒い感情」は、言葉にしてしまうと、他人を攻撃してしまうかもしれませんが、アートという形だったら、こういう感情がある、あなたにもある、そういうものだよと認められる。言葉だと正論しか言えないんですけど、そうじゃないことを表現できる。

どんな母親でもアートを通じて同様の体験ができるかという点で違っていて。今よりも少し人と近づきたいとか、人を理解したいと思っていて、かつ表現に興味がある人たちが集まって場をもつことができると、お互いの思いを共有して、今までの見方がほぐれるみたいなことが起きるのかもしれない...

ちょうど子育てがつかない時期でしたが、これを通して軽くなり、少し違う形で感じられるようになりました。頭で考えるだけとは違う理解が、今はできている気がします。

今回の公演では、日常の家事や育児にあることを「大変だね」と片付けるのではなく、「あなたががんばってるね」と称賛するでもなく、それを「扱ってくれた」んです。これはアートの切り口でしかできないのかもしれませんが。こんなふうに浮き上がらせてもらえるんだと思って...。本当に感動しました。言葉で説明することとか、右肩上がりに進化させていくことが求められる世界の中でも、家事や育児で楽しいと思うこととか、美しさを感じる瞬間もある。そこをちゃんとわかってくれて...。これを見た方々は救われた気持ちになったんじゃないかな。

森さんはこの体験をご自身のブログにも詳しく記してくださっています。  
[https://note.com/yumiko\\_mori/n/n1fb23df9d4aa](https://note.com/yumiko_mori/n/n1fb23df9d4aa)



森祐美子さん  
(認定特定非営利活動法人こまちぶらす代表)

以上の調査から、「拠点」や「地域の人」にとって次のようなアウトカムがあることが確認された。

### 拠点

- 自分たちでは知り合えなかった人たちとのつながりができた。
- 拠点の活動やコミュニティに対する認知が広がるきっかけになった。
- 拠点どうしがつながり、新たな創造ネットワークが形成された。

### 地域の人

- 作品だけでなく、アーティストにも出会うことで視野が広がった。
- 日常生活では難しい「思い」の共有や交換を通じて生きる活力を得た。
- 表現やコミュニティへの参加に対する関心が高まった。

## データ編

### ● 拠点運営者どうしを知り合った件数

### 5カ所中、5カ所

年度末にはアーティストや審査員、拠点運営者の方々が集まり活動を振り返る公開イベント「ACY感謝祭」を行う他、2024年には滞在拠点を互いにめぐりツアーを実施。それぞれの施設や運営について知ることができ交流の機会に。

### ● 拠点をめぐるツアー

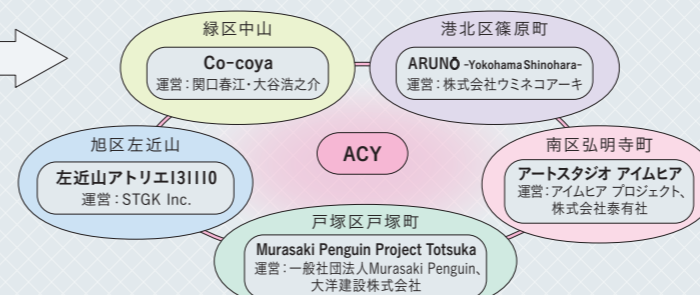
日時：2024年7月30日(火)  
13:00~19:30



訪問先：  
[Co-coyaと753Village]  
[ARUNOと  
新横浜食料品センターと  
集合住宅予定地]  
[左近山アトリエI31110とみんなのにわ]  
[Murasaki Penguin Project Totsuka]

### ● 拠点どうしのネットワークも生まれた

○ ... 滞在拠点    ● ACY    ● ACYがつないだネットワーク



### ● 取り組みの裏にあるもの

### ● ACYへの年間相談件数

120件 (2022年度) 内容や相談者は多岐にわたる。

内容	件数	相手方	件数
専門協議・助言	62	アート系	35
紹介/マッチング	14	クリエイター系/創造産業系	23
DB※1登録希望	12	一般企業	23
広報支援	11	行政関係者	16
助成	9	市民団体	12
視察/調査/取材	5	大学	3
情報提供	5	マスコミ	1
その他	2	その他	7
合計	120	合計	120

※1 横浜市クリエイターデータベース



## 5) ACY 事業全体におけるフェローシップ助成の位置づけ

追加調査を経て、ACY事業全体に対するフェローシップ助成の位置づけが明確になってきた。先に作成したフェローシップ助成のロジックモデルに2022年度末に定めたACYの理念※1（山括弧内）とフェローシップ助成の趣旨※2（角括弧内）を組み合わせ、整理し直したものが

下図である。今回新たに言語化された部分は、ACY自身の説明や助成趣旨をより実情に即した形で具体的に言い換えた目標・活動・成果となっている。

※1 <https://acy.yafjp.org/about/>（2025年1月31日取得）

※2 p.4



## 4. 結果

フェローシップ助成は、横浜市内の拠点での短期滞在（数週間または複数回）を通してアーティストのキャリア形成を支援するユニークなプログラムである。これまでは、アーティスト支援をしながら横浜の地域づくりに貢献しているという漠然とした説明の仕方をしてきたが、今回の評価活動を通じて、アーティストはもとより、拠点や地域の人、そして横浜市に対してさまざまな変化をもたらしていること、またその中でACYが重要な役割を担っていることが明らかになった。

アーティストにとっては、①作品発表を義務化しておらず、翌年度にフォローアップ助成を受けることができるなど、**アーティストとしての活動を支援する魅力的な制度であることがわかった**。加えて、②**ACYのネットワークを活用した支援により**、アーティストが短期の滞在中にも関わらず、拠点や地域の人たちと有機的に結びつき、創造的な活動を展開することが可能となっている。

拠点の人にとっては、③自分たちでは**知り合えなかった人たちとのつながり**が生まれ、④**拠点の活動やコミュニティに対する認知が広がる**きっかけになる。また、⑤拠点どうしがつながり、**新たな創造ネットワークが形成された**ことも大きな成果だった。

また、地域の人にとっては、⑥**アーティストと直接会って話をする**ことで**視野が広がる**こと、⑦**表現活動への参加を通じて日常生活では難しい「思い」の共有や交換**を行うことで生きる活力を得ること、さらには、こうした体験から⑧**表現やコミュニティへの参加に対する関心が高まる**。

以上のことは、今回の評価活動によって明らかになったように、横浜の創造都市施策と一体的なACYの活動展開、これまで培ってきた人材ネットワークとその活用、信頼性の高い情報発信、手間を惜しまないアーティストや拠点への支援活動に依拠している。

一方、より充実した助成制度にするためには、1) 公募要項・審査方法・実施内容の一体的な検討、2) 事業内

容や意義を知ってもらうためのより効果的な広報、3) 横浜市の他の政策とのさらなる連携などが課題となることが見えてきた。

## 5. 提案

以上のことから、次のような評価指標案が導き出された。

### アーティスト

- ①アーティストが横浜市内で新しい人や情報と出会ったか。
- ②アーティストが中・長期のキャリアや作品のビジョンがもてたか。
- ③アーティストが助成後に滞在拠点や市内他施設を活用できているか。

### 拠点

- ④拠点が新しい人や情報と出会ったか。
- ⑤拠点がこれまでとは違うアイデアや活用法を得たか。

### 地域の人

- ⑥文化芸術にふれる機会を広げることにつながっているか。
- ⑦横浜市内の新たな一面を知る機会があったか。
- ⑧アーティストや作品との出会いが、心理的な変化や認識の変化につながっているか。具体的にどのような変化があったか。

アーティストが拠点に滞在することで新たな出会いが生まれるというのは、本事業の肝となる部分だ(①)。ACYが情報提供や紹介を行うことでその広がりが促進されることから、ACYの行動指針としても重要である。また、本助成は発表を前提にせず、中・長期的な取り組みも含めて支援するものであるため(②)、助成期間後の活動についても追跡する必要がある(③)。

拠点は地域住民やアーティストが「やってみたい」と思う表現活動を後押しする場だ。アーティストや地域との交流により、拠点が今後の展開につながる出会いやヒントを獲得できたかどうかを知ることが大切である(④⑤)。

## 活動実績

### 2023年度

#### ● 加藤 立 [Co-coya]

滞在①：9/13(水)～9/23(土)  
 展示：「“Abstract Face” (on going)」  
 9/14(木)～9/23(土)  
 滞在②：11/16(木)～11/27(月)  
 展示：「“Abstract Face” (on going)」  
 11/18(土)～11/26(日)

#### ● 坂本 夏海 [Murasaki Penguin Project Totsuka]

滞在：10/7(土)～10/13(金)  
 WS①：10/7(土)、10/8(日)  
 WS②：1/6(土)、1/7(日)  
 オープンスタジオ&レクチャーパフォーマンス  
 「Dismantling Motherhood」2/24(土)、2/25(日)

#### ● 私道 かび [左近山アトリエI31110]

滞在①：11/1(水)～11/16(木)  
 滞在②：11/21(火)～11/24(金)  
 展示：「団地のこえ」1/7(日)～2/4(日)

#### ● 山岡 瑞子 [ARUNŌ -Yokohama Shinohara-]

滞在：9/11(月)～9/14(木)、9/18(月)～9/21(木)  
 展示①：「MAELSTROM photo in NY from 1998-2002」  
 9/11(月)～9/21(木)  
 上映：「Maelstrom マエルストロム」  
 12/2(土)～12/8(金) 会場：横浜シネマリン  
 展示②：「Artworks from the Documentary film “Maelstrom”」  
 12/2(土)～12/10(日)  
 会場：高架下スタジオsite-Aギャラリー

#### ● ユニ・ホン・シャープ [アートスタジオ アイムヒア]

滞在：11/22(水)～12/22(金)  
 拠点利用：12/4(月)～12/18(月)  
 オープンリサーチ①：「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)  
 ～地震・暴力・回復～」11/28(火)  
 オープンリサーチ②：「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)  
 ～地震・暴力・回復～」12/10(日)  
 発表：「ENCORE II - Violet (2024)」12/12(火)  
 会場：男女共同参画センター横浜南  
 \*YPAM Exchange  
 オープンリサーチ③：「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)  
 ～地震・暴力・回復～」12/15(金)

### 2024年度

[2025年1月22日現在・予定含む]

#### ● 鎌田 友介 [ARUNŌ -Yokohama Shinohara-]

滞在①：12/17(火)～12/23(月)  
 調査：12/24(火)～12/27(金) ソウル  
 滞在②：12/28(土)～1/8(水) 本牧等市内各所  
 トーク：1/6(月)

#### ● 工藤 春香 [左近山アトリエI31110]

WS①：9/18(水)、9/25(水)、9/30(月)  
 会場：左近山特別支援学校  
 WS②：10/2(水)、10/7(月)、10/9(水)  
 会場：左近山特別支援学校  
 滞在：11/18(月)～11/24(日)  
 展示：「わたしたちがいるために」  
 1/21(火)～2/9(日)

#### ● 敷地理 [Murasaki Penguin Project Totsuka]

滞在①：8/14(水)～8/19(月)  
 Dance Base Yokohama・急な坂スタジオ  
 滞在②：8/20(火)～8/27(火)  
 プレゼンテーション：「a butterfly swimming under  
 the water」8/25(日)

#### ● 永田 康祐 [Co-coya]

交流会：8/30(金)  
 滞在：9/25(水)～10/1(火)  
 WS：2/24(月・休) ※予定

#### ● 野村 真人 [アートスタジオ アイムヒア]

滞在①：8/7(水)～8/8(木) 弘明寺周辺  
 滞在②：10/18(金)～11/4(月・休)  
 発表：上演+展示「分身と観客」  
 11/2(土)～11/4(月・休)

※とくに記載がない場合、会場は各拠点

身近な場で文化芸術にふれる機会ができることは、横浜市の政策指標の一つである(⑥)。本事業ではとくにアーティストが横浜に滞在しリサーチや活動を行うことで、地域の内外の人を結びつけ、横浜を再発見する機会を提供できているかが問われる(⑦)。今回の追加調査により、アーティストの活動や作品にふれることで、大きな行動変容はなくとも、精神的な充足感、孤独感の低減、地域への信頼醸成、知的好奇心の喚起などが生じていることがわかった。事前で想定していなかった変化も含めヒアリングやアンケートを通じて声を集めることが重要である(⑧)。

## 6. 総括

フェローシップ助成の強みは、アーティストに資金を提供するだけでなく、アーティストとさまざまな人的・地理的・文化的リソースを結びつけて「化学反応」を引き起こし、横浜市を創造的に活性化する点にある。ACYはそのために横浜のリソースに関する情報を蓄積し、活用するノウハウを獲得してきた。今後は、今回作成したロジックモデルや指標を活用し、戦略的に活動を展開することで、より有機的に横浜各地での共創・協働を促進し、新たな価値を創造していくことが期待される。

今回は、アウトカム・ハーベスティングを用いた発展的評価を行うことで、事業価値を可視化できる指標づくりを試みた。ロジックモデルの作成・更新と不足しているデータの収集をくり返しながら評価する今回の方法は、事業評価を行う上でも、アカウントビリティ向上をはかる上でもある程度有効であることが示された。他事業にも手軽に適用できるよう方法論を整備していきたい。

### 主要参考文献

- 今田克司・津崎たから・中谷美南子 (2024) 「評価における『エビデンス』の考察—信頼性と活用可能性を巡る議論を中心に」『日本評価研究』第24巻第1号、7-22頁
- クロシツク, J. & カジンスカ, P. (2022) 『芸術文化の価値とは何か—個人や社会にもたらす変化とその評価』中村美亜訳、水曜社
- 源由理子、大島巖 (編) (2020) 『プログラム評価ハンドブック—社会課題解決に向けた評価方法の基礎・応用』晃洋書房
- Outcome Harvesting (<https://outcomeharvesting.net>)
- Patton, M.Q., McKegg, K., & Wehipeihana, N. (Eds.) (2016) *Developmental Evaluation Exemplars: Principles in Practice*. New York and London: The Guilford Press.

### 中村 美亜 (なかむら みあ)



九州大学大学院芸術工学研究院教授。専門は文化政策・アートマネジメント研究。芸術が人や社会に変化をもたらすプロセスや仕組みに関する研究、またそれを踏まえた評価や社会包摂に関する研究を実践的・学際的に行なっている。訳書に『文化芸術の価値とは何か—個人や社会にもたらす変化とその評価』(水曜社、2022年)、編著に『文化事業の評価ハンドブック—新たな価値を社会にひらく』(水曜社、2021年)、『ソーシャルアートラボ—地域と社会をひらく』(水曜社、2018年)、単著に『音楽をひらく—アート・ケア・文化のトリロジー』(水声社、2013年)など。日本文化政策学会、アートミーツケア学会理事。日本評価学会認定評価士。

## 対談

小原光洋 (ACYスタッフ)

×

(ACYスタッフ) 森絵里花

今回の共同研究では事業担当者自らが価値や指標を考えることを重視していました。中村研究室とともに評価や調査を行ったのがACYスタッフです。事業価値を可視化する方法論をさらに発展させ、広めていくためには、事業担当者がどのように考えたかを共有することも大切だと中村先生は言います。3年前からフェロシップ助成を担当する小原光洋と、2024年度からACYに加わり評価を担当した森絵里花が評価への取り組みを振り返ります。

取材・執筆：株式会社ボイズ  
撮影：小林璃代子

—ACYのアーティストを対象とした助成制度は2016年から開始し、要件や内容を変えながら続いてきた大事なプログラムだと思います。

小原：横浜市が次世代育成の施策に力を入れていたタイミングで、若手(39歳以下)のアーティストを対象とした助成を始めました。2022年頃からはコロナ禍を経た時流として、市民や地域への広がり求められるようになってきました。

そこで、これまでACYが活動の中心としていた都心臨海部から、それ以外の地域との連携に力を入れるかたちへと転換を図りました。

—アーティストの年齢制限をなくし、拠点とアーティストを出会わせ

## ACYスタッフ二人の実感と評価を通して見えてきたACYらしさ

—今のプログラムに変わって2年目の今年度、事業を評価することになった経緯を教えてください。

森：価値を明らかにして、さまざまな方に理解してもらう目的がありました。一方で、2024年度からACYの事業に携わる私としては「本当にできるのかな？」という思いもあって。まずは、評価のプロセス開発であればできそうだと思います。進めてきました。

小原：助成プログラムにおいては、その効果をクリティカルに言えてこなかった現状はあると思います。「生活やまちが豊かになる」とはよく言うけれど、具体的な説明ができていないプログラムは少ない。そこに取り組まなければという思いからスタートしています。助成要件に拠点滞在を加えたことで地域との関わりが出てきたので、アーティストを支援することの価値を「地域への広がり」の側面から説明できるのではと考えました。



—実際に評価を進めてみていかがでしたか？

森：ACYでは過去にも評価に取り組んできたので、まずはその蓄積を学ぶところから始めました。とくに中村先生にも携わっていただいた「Yokohama ArtLife (ヨコハマアートライフ)」<sup>※1</sup>では、アーティストや活動をジャッジするのではなく、事業改善

や自分たちが気づきを得るための評価をしていて。だから今回もその部分は大事にしたい。その上で、「自分たちの価値を言語化することは、市民へのアカウンタビリティにつながる」とあり、今回はアカウンタビリティを目的にするといいだろうなと。そういうふう過去の蓄積を読み解きながら、目的を定めました。ただ、私は2023年度の事業を見ていない難しさもありました。どんな活動があったかは報告書で読みましたが、自分の中に体感がない状態で、どう評価のプロセスを回していけるんだろうかと。でもそれは、事業をよく知らない方が「これってなんだろう」と思う視点と同じだと考えてみれば、一つ思考実験にもなるのではないかと、前向きに捉えました。

小原：最初に森は、昨年度何があったのかを僕と前任者から引き出すことをしていました。報告書などに載せきれなかった、僕たちの頭の中にあるものも含めて。知らないからこそ、知るためにやったことがよかった。

森：必死ですからね。それが付箋のワーク(p.9)です。先生から、まずどんなことが起きたのかを洗い出してと言われて。報告書から抽出したものに加えて、小原から聞いたことを追記していきました。



—小原さんは、2023年度もフェロー

シップ助成を担当されていましたが、2024年度に評価の視点が入ったことで、ご自身の事業への向かい方が変わった部分はありましたか？

小原：活動の主体はアーティストであるという認識は変わっていませんが、中村先生とお話するなかで、これまで漫然とやっていた「ACY的な動き」が、このプログラムの価値になっているんだと気づかされました。別のアーティストを紹介するとか、誰かと誰かをつなぐとか、そういった余計な「おせっかい」をもっといいんだと。

森：無意識でやっていたものに、自覚的になるみたいな感じがありますよね。

小原：そう、業務として定められているわけではない、プラスアルファの動きに意味があることを今回のプロセスが見出してくれた。あと、地域の人たちの声を、アンケートではない収集の仕方でも聞いたのも大きいです。それが事業改善につながっていくこともある。

森：評価のプロセスは、私のような新しく関わった人が、その組織のビジョンやマインドセットを獲得していくことにもつながります。ロジックモデル(p.10-11)を考えることで、自分たちの行動指針が見える瞬間があって。アーティストや拠点がいかに新しい情報や人につながるか、それが達成されるために必要なのは、先ほど小原が言った「おせっかい」なんじゃないかとか。

—今回作成されたロジックモデルの「最終アウトカム」は、ACYの目的そのものに近いように思います。

森：たしかにそうですね。「最終アウトカム」を考えるのは難しかったです。みんなが、「それはいい」と思える言葉をつくりたい。「まちが豊かに

なる」よりもちょっと具体的な言葉を置きたいけど、例えば「定住意欲を高めます」だと飛躍し過ぎだとか。「最終アウトカム」や「中間アウトカム」は逆算思考なので、今起きていることの成果を言語化する「直接アウトカム」を考えるのとは、頭の使い方が違うんですね。それはやっぱり私だけではなく、これまで見てきた小原を交えて、チームでやらなければ考えられなかった。



—評価の過程では、拠点や地域の人の声をどうアウトカムに盛り込んでいくかという課題もありましたね。

森：拠点の方たちの素晴らしさが、調査する中でとくに印象的でした。滞り場所の提供だけでなく、アーティストが来ることで、自分たちにどんな化学反応が起きるかなというモードでいてくださるんですね。そういった拠点の方々と出会っていたACYの過去の積み重ねがあるから今これができる。それはACYらしさでもあるし、大事なファクターだと思います。

小原：制度を変える時に、アーティスト・イン・レジデンスとしての事業にしたいはなかった。結果として、アーティストや地域とさらに関係性をつくってくれるだろうと思う拠点のみならずとつながることができました。ここは16年の活動のネットワークが活かされているところでもありますね。

森：また、今回の評価は「文化的価値を測る」ものとしていますが、「文化的」の中には「社会的」な価値も混ざっているなという感触があります。いわゆる「人と人が出会った」とい

うアウトカムは、例えば地域振興の企画でも出せるかもしれない。今回、拠点や地域の方々の声を直接聞けたので、アートのプログラムだからこそのアウトカムを考えるきっかけになりました。

—アートのプログラムだからこそのアウトカムについて、もうすこし教えてください。

小原：地域の人へのヒアリングでは、加藤さん(2023年度アーティスト・フェロー)と話をすることで「そういう見方があるんだ」と思えたとおっしゃっていた方がいました。ものの見方が変わる、知らない側面が見えてくる、さらにそこから何かを考えだしていく。そこは現代アートの重要なファクターだと思っています。わざわざどこかへ出かけてアーティストに出会うのではなく、自分が生活をする地域、身近なところのものを見方を変えてくれる人がいる。そんな状況が生まれること。それがアーティスト・フェロシップ助成の価値だと感じています。

※1 横浜市と公益財団法人横浜市芸術文化振興財団が、2019年度～2020年度に実施した芸術創造特別支援事業リーディング・プログラム

小原 光洋

2012年入職。横浜市民ギャラリーあざみ野や横浜赤レンガ倉庫1号館での事業企画制作、経営企画室を経て、2022年より現職。

森 絵里花

地方公立美術館で教育普及や社会包摂、市民参画事業に携わった後、2023年に入職。フェスティバル事業担当を経てACYに。

## おわりに

アーティストの創作活動支援の価値を可視化する今回の共同研究は、文化的価値を測る評価方法の策定と、アカウントビリティの向上を目的としました。

評価方法の策定は一つひとつのプロセスを模索する形となり、ロジックモデルの検討やアウトカムを補強するための追加調査を経て、指標を作成しました。客観的な評価として数字やデータなど測定可能なものを求められることも多くありますが、その前段である「何を価値として位置づけるか」、その上で「何を可視化または測定できるか」を検討するプロセスとなりました。

アカウントビリティの向上としては、ロジックモデルを考えるにあたり地域への広がりへと着目しました。この助成はアーティストのキャリア支援を出発点にしており、アーティストとのコミュニケーション、アーティスト自身の実感や言葉を大切にしていることは言うまでもありません。その一方で、より色々な方へ価値を伝えられるように、今回の研究では拠点や地域の方に焦点を当てました。その結果、アーティストの創造的活動がどのように地域に還元されるかの兆しを見ることができました。

指標の役立て方は、単年度で測定とフィードバックを行うものもあれば、複数年度をかけて見ていくものもあります。ACYでは2024年度より「フォローアップ助成」を実施しており、アーティスト・フェローが翌年度に横浜で発表することを支援しています。今回の追加調査も、そうした流れを受けて実施することができました。

評価とは外部への説明だけでなく事業改善にも役立つものです。今回の共同研究では地域への広がりへ注目しましたが、今後はアーティストのキャリア支援の観点も鑑み、展示や上演・交流プログラムの来場者アンケートやアーティストや拠点へのヒアリング項目、次年度の募集要項などに今回考えたことを取り入れられるよう検討していきます。

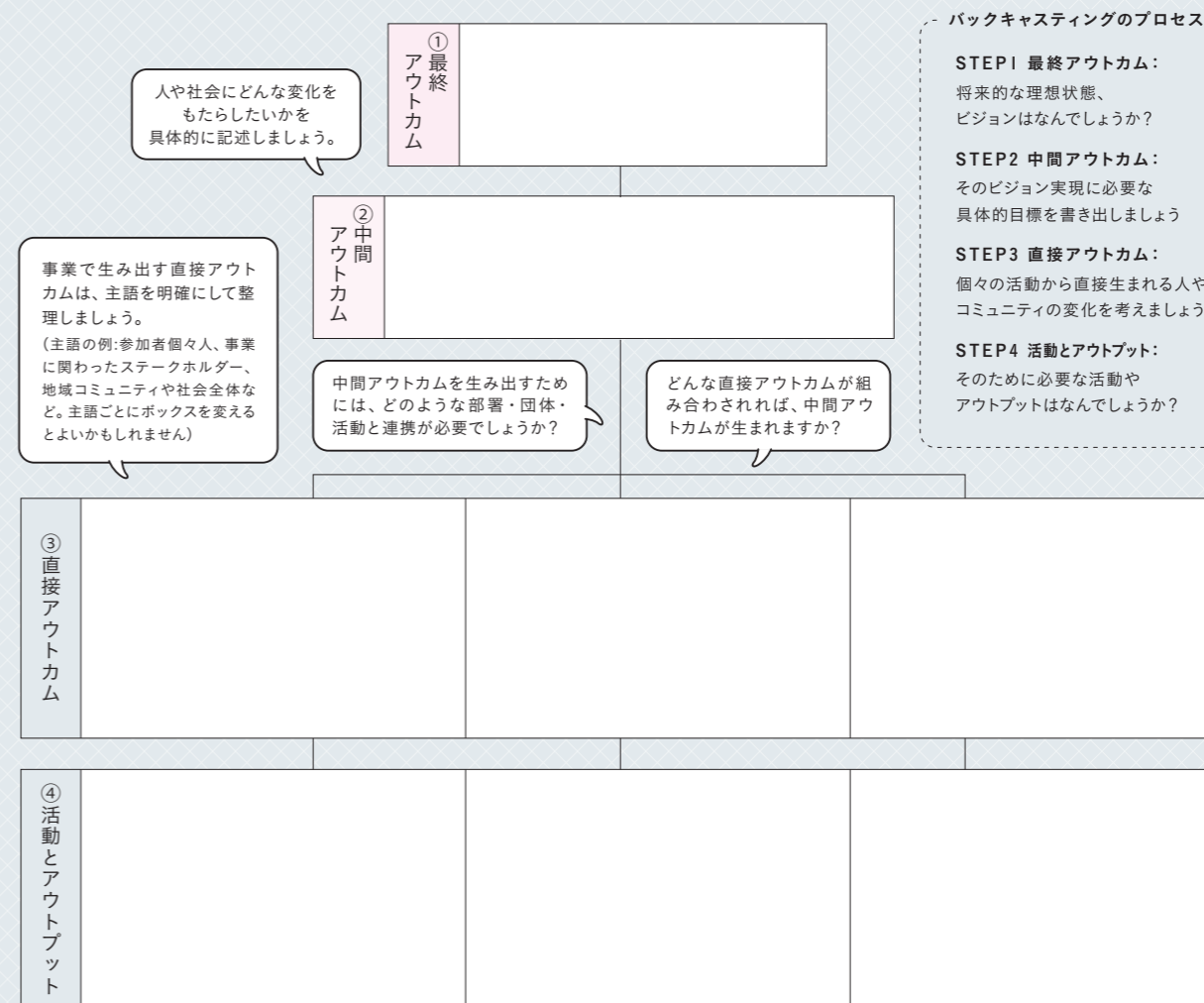
アーティストのキャリア支援からその先の展開や地域への広がり生まれ、その価値が伝わるよう、これからもACYではコミュニケーションや情報発信を続けていきます。

アーツコミッション・ヨコハマ

1. まずは、対象とするプロジェクトがもたらした変化を下の図を参考に考えてみましょう。

	即時的 すでに変化があったこと	中期的 変化が現れはじめたこと	長期的 論理的に 今後見込まれる変化
参加者個人 行動、意識、態度、理解、 関心、スキル、生活状況など			
事業に関わった ステークホルダー 組織のあり方、運営の仕方、 関係性など			
地域コミュニティや 社会全体 意識、関心、社会のしくみ、 社会状況など			

2. 次に、そのプロジェクトのロジックモデルを作成。以下の図を参考に、最終アウトカムからバックキャストで考えましょう。※ただし、検討の途中で、上位のアウトカムをよりよいものに修正するのは構いません。



※「直接アウトカム」と「活動とアウトプット」の3つのボックスは、対象プロジェクトに合わせて増減してください。

---

## 「ACYアーティスト・フェローシップ助成」の評価に関する共同研究

研究担当：国立大学法人九州大学大学院芸術工学研究院 中村美亜研究室  
公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 経営企画・ACYグループ

実施記録：オンライン会議（編集を含む）9回 [計約15時間]、  
対面ワークショップ2回 [計約7時間]、  
現地調査1回（2拠点を訪問） [計約7時間]、  
オンラインインタビュー5組6名 [計約5時間]

---

## 「ACYアーティスト・フェローシップ助成」の評価に関する研究報告書 —アーティストの創作活動支援の価値を可視化する試み—

監修：九州大学大学院芸術工学研究院 中村美亜

編集：株式会社ボイズ 安部見空、及位友美

九州大学大学院芸術工学研究院 中村美亜

アーツコミッション・ヨコハマ 小原光洋、森絵里花

協力：岡田容子、黒田杏菜、坂本夏海、齋藤好貴、齋藤梨津子、関口春江、  
David Kirkpatrick、長岡親一郎、森祐美子、八島道夫（敬称略）

デザイン：デザイン事務所Folk

印刷・製本：株式会社ココラボ

発行：公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 経営企画・ACYグループ

〒231-0023 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル1階

2025年2月14日発行

---

©2025 Arts Commission Yokohama



---

令和6年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

